

## 大田 堯の「ひき出す」、我流解釈

岩田 好宏

キーワード：ひき出す、学習助成、学び、自己再構築、その気になる

大田堯は、educate という英語の原語であるラテン語の educare の意味が lead out (誘い出す、ひき出す) であることから、通常いわれている「教え、育てる」にかかわって、子どもの学びへのおとなのかかわり方について「ひき出す」という考え方を重視した。これをどのように理解したらよいか。これは、まちがいでなく教師学としての教育学から子ども学としての学習学への転換であると思っている。過去の若者の学びとのかかわりを思い出す中で、思い当たることがあることから、それをもとに我流の解釈を試してみた。

1. 1998 年、授業で大田堯の『教育とは何か』の最初の 3 節を読んで何が大事か考えてもらった。その時、生物の授業だからという思いからであろうか、大部分の高校生は倒木更新や水生昆虫のこと、キツネのことについて書いていたが、2 人だけ高校を中途退学した若者に対して中小企業関係の団体の人たちがその若者が自立できるようにと手助けしていることを書いていた。これ以後「人間学」の授業にした。

2. 2003 年高校 1 年生に、何でもよいから、学校で学びたいことがあったら、書いてほしいとアンケートをしたところ、3/4 は、自分のこと、親しい人との付き合い方などに関することで、6 割をこえる若者が、希望す内容が具体的でなく、漠然としたものであった。

3. 1994 年 1 月、選択生物の 3 年生に、人間と自然とのかかわりの歴史の授業を、環境問題に取り組んだ人たちを中心にして行った時、“なぜ 1 年生の時にこのような授業をしなかったのか”という詰問を受けた。この年から、授業内容を大きく変えた。

4. 1991 年から 1993 年までの 3 年間、高校 1 年生物で、1 年間かけて戸坂潤の『生物学論』を読む授業をした。その時多くの若者が、学ぶというのがどういうことかわかったという感想を書いていた。

5. 神奈川県のある高校の総合科 1 年生が学習課題を自分で決め、同じ主題で学びたい者を募集して「学友」という学習の小集団をつくり、自分たちで学ぶという授業をした。

若者は、自身の常識から出発してそれを乗り越え、自己再構築する学習を望んでいるらしい。